

cow を [kæʊ] と発音する傾向の分析

沼 野 治 郎

英語の発音は絶えず変化している。cow [kau] (牛) という語が [kæʊ] と発音されることがあることに最初に気づいたのは、米国のユタ州プロボ市にあるブリガムヤング大学に留学したときのことであった。時期は1974年から1976年であった。そして同じ傾向は米国西海岸の人々の発音にも見受けられた。これは、クーラスとマックデービッドが1961年に取り上げ、ノアム・チョムスキーとモリス・ハレが“The Sound Pattern of English” (1968) で認めているように、わたり音 glides の前の低母音 low vowels は大変地域的な差異が生じやすい¹⁾、という現象にあてはまる例である。

この研究の目的は、(1) [au] → [æʊ] の変化が他の母音ないしは二重母音と重なりを生じ、オーストラリア英語の二重母音のように母音体系にシフトを起こすものであるのかどうか²⁾、(2) [æʊ] の傾向の程度、(3) この変化は特定の語彙に限られたものかどうか、(4) この変化はどう説明することができるか、どんな規則 rule で表わすことができるか、に焦点を当てて進めるものである。

I 先行研究および記録

[au] を [æʊ] と発音する傾向について記録した先行研究を、以下年代順にあげる。

注1) Chomsky, Noam, and Halle, Morris, *The Sound Pattern of English*, Harper & Row, 1968, p. 188.

2) 沼野治郎「オーストラリア英語の二重母音シフト」、『徳山大学論叢』, 32号, 1989年。

1 Raven I. McDavid, Jr. は “SOME SOCIAL DIFFERENCES IN PRONUNCIATION” (Language Learning, 1952-1953) の中で次のように書いている。「cowのような語における /au/ の第一の要素が前に寄って [æʊ, εʊ] と発音されるのは、北部ニューイングランド、ニューイングランド、南部、中南部 South Mid-land に見受けられる。北部ではそのような発音は一般に時代遅れで、いなか風と考えられ、姿を消しつつある。リッチモンドのあたりではごく普通に聞かれ、南部では南カロライナを除いてあらゆる所で広がっているようである。」³⁾

2 上記と同じ著者 Raven I. McDavid, Jr. は “The Dialects of American English” (1958) で次のように詳しく記している。ヴァージニア州東部で house, out の場合のように無声子音の前では [əʊ, ʌʊ] (音素表記 /əw/) となり、down, loud のように有声子音の前では [æʊ] (音素表記 /æw/) となる。これは年配で学歴の低い人から、現代的な若者、教養のある高学歴の人にいたるまで言える。そしてチャールストン地域やカナダでも同じである⁴⁾。

また南部と中部南方地域の共通な特徴として、mountain, loud などの発音で /æw/ が優勢であると書いている。ここでも話者は学歴、年齢、教養を問わず共通している⁵⁾。

3 J. S. ケニヨン「アメリカの発音」(9版1958年) の中で次のように書いている。「第一要素が [æ] またはそれに近い音であるような発音はイギリスでもアメリカでも方言には広く分布している。[æʊ] という発音はイ

3) McDavid, Raven, Jr., Some Social Differences in Pronunciation, (Language Learning 1952-1953) in Kerr, Elizabeth M., and Aderman, Ralph M., *Aspects of American English*, Harcourt Brace & World Inc., 1963.

4) マクデイビッド, R. I., Jr. 著, 長井善見訳編「アメリカの方言」, 南雲堂, 1975年, 77ページ。

5) 同上書 81ページ。

ギリスの田舎の方言でよく聞かれるものであり、また『ヤンキー』ことばのしるしとして、昔から知られている発音である。…… [æʊ] という発音、あるいは第一要素が [a] よりもずっと [æ] よりで [au] を用いる人たちの耳につく二重母音は、アメリカ南部の教養人のことばには多く見られる特徴であり、しばしば教育を受けたイギリス人の発音にも聞かれる。」また「バージニア州の Blue Ridge 山脈の東側では、この二重母音は、有声子音の前あるいは語末では、次のように [æʊ] となるのが普通である : ground [græʊnd], bowed [bəʊd], how [hæʊ]。これに対し無声子音の前では次のように [ʌʊ] となる : house [hʌʊs], bout [baʊt], mouth [maʊθ]。したがって、単数形 house [hʌʊs] と複数形 houses [hæʊzɪz], あるいは名詞 mouth [maʊθ] と動詞 mouth [mæʊð] のようなこの二重母音の違いができる。」⁶⁾

4 クーラスとマックデービッドの「大西洋岸諸州の英語の発音」(“The pronunciation of English in the Atlantic states” [PEAS] 1961)は、[æʊ] 型の発音がニューイングランドの田舎の地方に聞かれる、と記している⁷⁾。

5 竹中治郎は1962年に著わしたアメリカ英語の解説書でこう書いている。「[au] を [æʊ] と発音するのはイギリス方言にもあるが、いわゆる標準語の中にはない。しかしアメリカ英語では大学の教授のような教養の高い人の間でもときどきこの発音が口にされるので知っておく方がよい。」⁸⁾

6 1962年小栗敬三は [au] が [æʊ] となる方言がある、cow を [kæʊ]

6) ケニヨン, J. S. 著, 竹林滋訳「アメリカの発音」, 大修館書店, 1973年, 214, 215ページ。

7) Wells, J. C., *Aspects of English*, Cambridge University Press, 1982, p. 488.

8) 竹中治郎「アメリカ英語の知識と用法」, 泰文堂, 1962年, 83ページ。

と発音する米音がある、と記している⁹⁾。

7 S. クックは1969年米国ユタ州ソルトレーク市において、[au] は [æʊ] にとって代わられつつある、と報告している¹⁰⁾。

8 H. B. アレンは1976年「北部中西部言語地区」(LAUM)で、この変形がネブラスカやアイオワの一部でも見られ、中部地方の影響と考えられる、と報告している¹¹⁾。

9 A. C. ギムソンは「英語発音緒論」(1980年)の中で、ロンドンでは一般市民の発音も修正気味の発音(modified forms)も、第一要素は[ɛ]か[æ]であることが見受けられる、と述べている¹²⁾。

10 J. C. ウェルズはロンドンの話し手の中、容認発音RPを話す人たちはmouthを[mauθ]と発音するが、一般市民(popular London)は[mæʊθ]と発音すると書いている。また米国のフィラデルフィアでも[æʊ]型が知られていると記載している(1980年)¹³⁾。

11 1988年「アメリカ英語概説」を著わした竹林滋他は、out, loud, howなどの/aʊ/の二重母音について、RPと違って/aʊ/[aʊ~aʊ]のほかに/aʊ/[æʊ]が目立つと述べ、方言別に次のように詳説している。

ニューヨーク市:/æʊ~aʊ/[æʊ~aʊ~aʊ]まで観察される。

9) 小栗敬三「英語音声学概論」, 篠崎書林, 1962年, 57ページ。

10) Cook, S., Language change and the emergence of an urban dialect in Utah, Ph. D. dissertation, University of Utah, 1969, cited in Wells, J. C. op. cit.

11) Wells, *ibid.*, p. 448.

12) Gimson, A. C., *An Introduction to the Pronunciation of English*, Edward Arnold, 1980, p. 138.

13) Wells, op. cit., pp. 310, 488.

中北部 : /aʊ ~ æʊ/ が一般的である。

中南部 : /æʊ ~ aʊ/ が一般的である。

南部 : (1) out, house のような無声子音の前 : ヴァージニア高原地帯, 東部カロライナ地域では, /əʊ/ であるが, その他の南部地域では /aʊ ~ æʊ/ が一般的である。(2) how, cow のような語末および loud, rouse のような有声子音の前 : ヴァージニア高原地帯では /æʊ/ [æʊ] が普通で, その他の南部方言では(1)と同じ /aʊ ~ æʊ/ である¹⁴⁾。

II 資料

過去1年半の間に耳にした, 私の身近に迫っている英語に観察できた例から分析してみたいと思う。それは英語が話されている地域をくまなく徹底して調査したものではないが, 日本の一地方にいても観察できるもので現在の英語を充分代表するものであると考えている。以下英語を母国語とする人をインフォーマントとするもの, ラジオ(米英豪の短波放送), テレビで聴取したもの, テープから聞いたもの70人の発音をもとにまとめて記すことにする。なおいずれも明瞭に [æʊ] の二重母音が聞かれた例である。

- 1 ニューヨーク州シャンプラン湖辺の人々。テレビ番組から。
mouth, down, about, doubt (3人の住民と1人の教授から各一語)
- 2 Voice of America (米国ワシントンD. C.) で聞いた例。
now, down, council, couch……アナウンサーの発音から。
counsel……インタビューされている人。
- 3 Christian Science Monitor の放送 (米国マサチューセッツ州ボスト

14) 竹林滋, 東信行, 高橋潔, 高橋作太郎「アメリカ英語概説」, 大修館書店, 1988年, 155ページ。

ン) で聞いた例。

count, account, county, now, } ……複数のアナウンサー。
about, power, how, accounting} account, county はインタ ビューされている人の発音 にも聞かれた。

4 ペンシルバニア州ピッツバーグ市の女性。

county, now にはっきりした [æʊ] の発音。

5 ジョージア州アトランタの女性。

house に明瞭な [æʊ]。この人はジョージア州立大言語研究センターの人。

6 テキサス州で生まれ育った女性 (55歳)。

mouth, about, count, cow, count, house に [æʊ] の傾向。
シカゴで教育を受け Ph. D. を持ち, 南部方言は抑えているが, 上の語にその傾向が見受けられた。

別のテキサス出身の女性……cow に [æʊ] の発音。

ブッシュ前米国大統領……down にこの傾向。(カナダの国旗を upside down に掲げたことに関して)

7 西部山岳諸州の人々¹⁵⁾。

cow, counselor, mountain, account, councilman, about, down,
now, house, counter, mouth, Cowan, countless, counsels, council,

15) この地域, 特にユタ州の教育, 研究者のテープを多数入手したので, 例が多く上がっている。

1993年12月 沼野治郎 : cow を [kæʊ] と発音する傾向の分析

encounter, mount, tower, how, counteract, power, unfounded,
accountability, recount

……複数の講演, 研究発表のテープなどから聞き取れたもの。

8 米国西海岸の人々の例。

カリフォルニア州のある裁判長……count に [æʊ] の傾向。

ワシントン州シアトルの青年……town, cow に明瞭な傾向。

ロサンゼルス局アナウンサー……town, now, out に。

サンフランシスコ出身の男性……cow, count, town, doubt に
[æʊ] の傾向。

9 B B C (British Broadcasting Corporation) の放送で聞いた例。

council, county, count down (特に前の count), down

……以上いずれもアナウンサー

compound……インタビューを受けていた医師 (大学教授)

10 英国人のテープ。(学書房の教科書 Life in the UK Today '87)

town, house

11 米国人のテープ。(朝日出版の教科書 Interactive Reading '93)

now, down, found

12 オーストラリア人 Martin St. James (催眠術師)。

count が日本語ではキャウントに聞こえた。ただし down には聞かれなかった。

- 13 オーストラリア人のテープ。(教科書 *How to Succeed in Australia*)
found, down
- 14 Radio Australia の correspondent
power
- 15 ソロモン諸島の男性。(BBC のインタビューで)
account
- 16 その他, 日本のラジオ英語教育番組で聞かれた例など。
- i NHK 英語教育放送 (原岡彰子担当) のゲスト (女性)
- bank account*
bargain counter
down
- ii NHK 英語教育放送 (杉田正担当) のゲスト (男性)
- find out*
about
- iii 米国 (西ヴァージニア州) に留学した日本人 A
- ……*cow* に明らかな傾向。
- 米国 (ユタ州) に留学した日本人 B
- ……*counselor* に明瞭な傾向。
- 英語でディスクジョッキーをしているグレース・ヒロコ (日本人)……*count down* に。

III 分析・解釈

まず英語の二重母音の特徴についてみると, 二重母音では卓立 (*prominence*) が前部か後部のどちらかに集中するものであるが, 英語の場合通常

前部にあり、後の要素はほんの軽く発音されるだけのわたり音 (glide) である。これは現在英語の「母音の前の母音は張り母音となる」という一般規則と関連し、定式 $V \rightarrow [+tense] / ______ V$ で表される¹⁶⁾。

このような二重母音を下降二重母音 (falling diphthong) と呼ぶ。そしてさらに二重母音の向かって行く方向によって分類されるが、[i, u] に向かうものを舌の位置から上向き二重母音 (closing diphthong) と言い、[u] に向かうものを後向き二重母音 (retracting diphthong) と言う。今扱っている /au/ はこれに相当する。前書きでも述べたが、この長さ強さとも前に集中する下降二重母音は特に地域のおよび社会的言語差によって変化を生じやすいことが指摘されている¹⁷⁾。

以下前書きにあげた質問に答える形で順に分析・解釈を進めることにする。

1 [au] → [æʊ] の変化が同音異義語 homophony を生み出して、オーストラリア英語のように二重母音体系に、あるいは単に母音体系に連鎖的なシフトを起こすものであるか、という問題の答えは否である。意志の疎通を可能にする対立 (significant opposition) という観点からみて、英語の場合、[au] に対立するものは [aɪ, ɔɪ] であって、[au] が [æʊ] になっても対立が失われて、混乱が生じるということはない。(二重母音間でなく council と cancel が紛らわしくなるということは起こるが。) 結局 [æʊ] は [au] の異形 variant で一つの異音 allophone が追加されたものとみるべきである。ギムソンは英語の余剰性 redundancy が音素に見られると言っている¹⁸⁾が、[æʊ] は音素 /au/ の余剰性あるいは広さを示す例であろう。私がインフォーマントに cow を [kau] , [kæʊ] と2通りに読んで聞かせても、同じだ、違いはない、と言う。もう一度少し極端に発音してみせても、あまり違いはないという。これは2つを同一の音素 phoneme の異音 allophone

16) 島岡丘, 佐藤寧「最初の音声学・音韻論 —現代英語を中心に—」, 研究社, 1987年, 49ページ。

17) Gimson, op. cit., p. 128.

18) Ibid., p. 77.

と感じ取っているからである。

2 [æʊ] の傾向はどの程度にいたっているのか。従来の観察記録や研究によれば、米国ニューイングランド、南部、中南部に聞かれ、北部では田舎風と考えられ、姿を消しつつある（マックデイビッド、1952-1953）、あるいは方言に聞かれる（ケニヨン、1958、小栗敬三、1962）とされていた。それがユタ州（クック、1969）、ネブラスカ、アイオワ州（アレン、1976）にも観察されるようになってきている。それが今回聴取したところによれば、南部はもちろん北部にも、西部山岳諸州、西海岸諸州の人々の発音にもよく聞かれることがわかった。またラジオ、テレビのアナウンサーの発音や大学の教授など教養ある人の言葉にも聞かれるので、一般アメリカ英語（General American）の中に入ってきていて、もはや方言であると言うことはむしろかしくなっているのではないだろうか。

この発音のことを聞くと、それは南部の発音だとか、方言であるという人がいるが、[æʊ] の浸透ぶりは相当なもので、受容度も高いものと思われる。私個人は cow を [kæʊ] と発音することはきれいとは思わないし、批判的である。/au/ が [æʊ] と発音される比率はまだ多数派ではないが、一般アメリカ英語にも聞かれることがふえており、西部山岳諸州と西海岸の人々の間では優勢を占めていると言うことができる。

3 この変化は特定の語彙に限られたものか。

このことについてロージャー・ラスの説明と比喩がよくあてはまると思われるので、引用しながら答えてみることにする。ラスは言語上の変化は、徐々に、語彙については選択的に生じるように思われ、過渡的な期間を必要とする、とみている。そして変化は典型的には「語彙的拡散」（lexical diffusion）と呼ばれる過程をへて起こるようだと書いている。そしてこれを説明するのに、疫病の伝染の例を引いている。疫病はかかりやすい人とかかりにくい人がある。当初は少数の患者に始まり、うつりやすい人から蔓延

していく。同様に発音の変化も特定の語彙から始まり、変化しやすい語彙のグループをへて他の変化し得る語彙に広まっていく、というのである¹⁹⁾。ヨーアンセンも言語が集団で変化する際、話される語彙の頻度も決定要因である、言い換えればよく使われる単語がまず変化を受ける、と書いている。また徐々に起こることについて、「同一の単語の諸異形は同一言語共同体内において、そして同一話者の言葉においてさえかなり長期間同時変動をする」と述べ、変化の過程にあっては共同体、個人の両方において元の形と新しい形が混在しつつ推移すると説明している²⁰⁾。

[au] → [æʊ] の変化は語彙的拡散の点でも、徐々に変化するという点でもまさによくあてはまる例である。観察した例の数と頻度から、[æʊ] を含む発音は cow, count, counsel, account など /kau/ という音を含む語彙に最も多く聞かれ、これが「語彙的拡散」の核となる語彙グループとなっているようである。表1参照。

この [æʊ] の傾向がどこから始まったかと言えば、古くからイギリスの方言にあった(ケニヨン, 1958, ギムソン, 1980, ウェルズ, 1980) ことが認められているように、チャールトン・レアードは英国から持ち込まれたものに違いないと個人的見解を記している²¹⁾。私もオーストラリアの二重母音シフトの場合と同様英国に源を発するものであろうと考えている。

4 この変化はどう説明することができるか、どんな規則 rule で表わすことができるか。[au] が [æʊ] になる変化をチョムスキーとハレは、後わたり音 (back glide) [w] の前の母音が -back になるとして、次のような統合的变化 (syntagmatic change) である異化 (dissimilation) の規則を

19) Lass, Roger, *Phonology; An Introduction to Basic Concepts*, Cambridge University Press, 1984, p. 327.

20) ヨーアンセン, エーリ・フィシャー, 林栄一監訳「音韻論総覧」, 大修館書店, 1978年, 413ページ。

21) Laird, Charlton, *Language in America*, Prentice-Hall, Inc., 1970, pp. 189, 190.

表1 二重母音 [æʊ] が聞かれた単語のリスト

(1992年5月～1993年9月に採取したものを頻度の多いものから掲載。
ただし1人の話者が繰り返し口にしたものも1回と数えている。)

account	14	[参考] [æʊ] の傾向の	
down	12	ある話し手が話した語の	
count	8	中でその傾向のない単語	
council	8		
now	8	about	4
counsel	7	house	3
about	7	out	2
counselor	6	our	2
cow	5	how	2
house	4	bow	1
town	4	found	1
county	3	confound	1
power	3	foundation	1
found	3	founding	1
mouth	3	Faust	1
counter	2	surrounding	1
Cowan	2	however	1
out	2	mountain	1
councilman	1	without	1
countless	1	ours	1
cowardly	1	now	1
counteract	1	shout	1
couch	1	cow	1
scouting	1	outside	1
encounter	1	power	1
accountability	1	down	1
recount	1	south	1
how	1		
mountain	1		
mount	1		
compound	1		
doubt	1		

掲げている²²⁾。

$$\begin{bmatrix} + \text{voc} \\ - \text{cons} \\ + \text{low} \end{bmatrix} \rightarrow [- \alpha \text{ back}] / \text{---} \begin{bmatrix} - \text{voc} \\ - \text{cons} \\ \alpha \text{ back} \end{bmatrix}$$

22) Chomsky, Halle, op. cit., p. 178.

異化 (dissimilation) は隣合う分節 (segment) において、素性 (feature) が類似の方向ではなく反対の方向に移動することをさす。この場合後続する後わたり音 [w] の +back に対し [a] から [æ] と前方へ、すなわち -back の素性を帯びているのである。これは発音するときに素性 (feature) を隔たらせて、明確に聞きとれるようにするためであろうか。

マックデービッド、ケニヨン (それぞれ1958年)、竹林 (1988年) はバージニア州東部で house, out のような無声子音の前では [au] となり, down, cow のように有声子音の前と語末では [æʊ] となる, と書いている。すなわち言いかえると

[au] → [æʊ] / ___ C [+voice] or / ___ #

という規則が成り立つということであった。今回聴取した資料によれば、やはり頻繁に聞かれる [æʊ] の例は有声子音の前と語末にくる場合がずっと多いことがわかった。例えば count, down, now など。表1参照。しかし, house, about, mouth など語の数は多くないが無声子音の前にも現われており, rule を越えて音声環境の相違を無視して生じつつあるように見受けられる。conditioned change から unconditioned change に向かっている。

次にストレスの有無との関係であるが, 次の英国人の例でわかるように, 強勢が置かれるときに [æʊ] になりやすく, ないときには [au] で発音されることがあると言える。

The Smiths live in a *house* rather than a flat.

The *house* that the Smiths live in is in the suburbs.

flat でなく house にと強調している前の文と house が主語でしっかり読まれる後の文で house は [hæʊs] と発音され, 次のように

It is a typical British *house*.

All the relatives gather at the Smiths' *house*.

前の語が強調され、house が軽く発音される場合には [haus] となり [æʊ] は現われてこない。(この文を読んでいるのは学書房の英語の教科書にテープを吹き込んでいる英国人である。) 同一人物でも同じ語に [æʊ] が出たり出なかったりすることがあるのは、この stress が関係していると思われる。しかし、cow や counselor など [æʊ] が定着してしまっている語については、stress の有無に関係なくその傾向が出ている。

またもう一つ言えることは、[æʊ] の傾向のある話し手は一般的にも [æ] の傾向が見られるということである。例えば come, country, calf, behalf などに [æ] の音が強く聞かれる。

IV 結 論

[æʊ] の傾向について Bronstein は1960年に次のように述べている。「変化の方向は終始一貫して前に向かって来ているようである。[äʊ, aʊ] に代わる [æʊ] または [aʊ] は、格式張った話し言葉では特に、今日好まれる形でないかもしれない。しかし、通常の会話体でのその使用が『消えてなくなることを望む』のは無理である。多くの教育ある話し手が、彼らの正規の話し言葉でそれを用いている。」これについて Bronstein を引用した榎矢好弘は、「好まれる形でない」というのは10余年の歳月が経って事情が変わったかもしれない、Uldall は1971年に [æʊ] は普通 (common) であるとだけいっていると書いている²³⁾。

1960年において既に Bronstein に終始一貫して前 (front) に向かっている、消えてなくなることを望むのは無理である、と言わせ、10年後に Uldall

23) 榎矢好弘「英語音声学」, こびあん書房, 1976年, 245ページ。

が普通であると言ったこの [æʊ] の傾向は今日それから20数年たっている
ので、さらに一般化しているのは当然と言わなければならない。

今日の社会にあって、ラジオ、テレビの普及は発音の変化を止める働きを
するものと考えられるが、資料の中に見られるように放送の中にも [æʊ]
の傾向が明らかに聞かれる。ギムソンは教育の普及も、教育を受けた人が階
層の高い人とは限らなくなってきて、地域のおよび社会的方言をとどめるよ
うになり、変化をとどめるとは限らない、とみている²⁴⁾。

[æʊ] の傾向は今日一般アメリカ英語 (General American) の特徴の一
つとなり、定着しつつあるとみてよいだろう。

今日 [æʊ] の傾向が目立って見られる語は、私の観察によれば cow,
count, council, account など /kau/ の音を含む語が多く、核を構成している
ように思われる。そして有声子音が語末の前で [æʊ] となるという先行研
究の規則はかなり生きてるように思われる。上にあげた語はそれにあて
はまる。そのほか now, power などともそうである。しかし、この規則を越え
て無声子音の前でも house, about, out などに [æʊ] が聞かれるものも出て
いる。

この現象は地域によっては変化が全面的に行き渡っているが、より広い
標準語の世界では拒否されたり部分的な形でしか現われておらず、まだ多
数派を占めるにはいたっていない。しかし変化そのものは、今や特発的
(sporadic) なものではなく、また二重母音の音素としては音の環境からく
る規則を越えつつあるので、conditioned change でもなく unconditioned
change に向かっている。このまま推移すると最後には古い形はすたれて消
失し、規則的な変化と化して、変化を受けなかった単語が僅かに残るとい
うことになるかもしれない。長期的に見ればこの変化は house という語が中英
語 (Middle English) 以来

[u : → əʊ → aʊ → æʊ]²⁵⁾

24) Gimson, op. cit., p. 89.

25) Wells, op. cit., p. 256.

と変化しているという大母音推移をたどっているようである。さらに20年30年たったときそのようになっているかどうか確かめたいものである。